

ブリトニー・スピアーズ 去勢執行②

Britney Spears - Pop Tart, Ball-Buster by Number 2



3 第1ラウンド

男の最大の急所を蹴り上げたばかりとは思えぬほど、ブリトニーの表情は穏やかだった。彼女は、これから犠牲者となるべき男たちに向かって言った。

「忘れないでね。倒れたら、負けが決定だからね。では、はじめま〜す！」

彼女は両手を叩くと、誰から始めるか決めるように、一人一人の顔を眺めまわした。

彼女が最初の犠牲者を選んだのは、ブロンドのリッキーだった。

彼女は、彼に歩み寄ると、思い切り脚を後方にはねあげ、猛烈なスピードで彼の股間に足を叩きつけた。

その瞬間、端正なリッキーの顔に苦悶の表情が浮かび、眼に涙が溢れ、悲痛な呻きが口から漏れた。

凄まじい激痛に苛まれているのは明らかだった。

彼女は、もう一度、同じくらしい勢いで、彼の睾丸を蹴り上げた。再び、最初よりも甲高い調子で、呻きが漏れた。

ブリトニーは間髪入れず、三度目の蹴りを、リッキーの睾丸に浴びせた。ピンクのブーツの先端が、陰囊にめりこんだ。

呻きは、さらに甲高い絶叫に変わった。

他の四人のダンサーたちは、恐怖の眼差しで、小柄な少女と長身の青年とが繰り広げる邪悪なダンスを見つめている。

リッキーの両脚ががくがくと揺れはじめ、膝が落ちはじめ、上半身が床に向かって傾きはじめた。すかさずブリトニーは、テーブルに置いたナイフをつかみ、彼の前にひざまずき、ナイフを股間に向けた。

それを見たリッキーは、膝をついた後で彼を見舞う運命を思い出したのだろう、必死に態勢を建て直した。

「あつという間に終わっちゃうかと思ったわ」

彼女は残念そうにナイフをテーブルに置き、デビッドに向かって言った。

「次は、と……」

彼女は、30センチの長さを誇る、スキンヘッドの黒人ダリウスにお尻を向けて立った。

ちよつと上半身を前方に傾け、いきなり脚を後ろにはねあげた。ブーツの踵が、ダリウスの股間を襲った。

「うぐー！」

ダリウスがうめいた。ブリトニーは弾けるような笑みを浮かべて彼に向き直り、すぐに膝蹴りを浴びせた。

「ああっ！ 神様！」

ダリウスは顔をゆがめて悲鳴をあげた。

「神様は助けてなんかくれないわよ」

彼女は、嘲るように言い、満足げに微笑み、いきなり向きをかえて、今度はプエルトリカンのカルロスの睾丸に、爪先をたたき込んだ。

ドガッ！

大きな音が響いた。

ドガッ！ ドガッ！

立て続けに同じ音が響き、部屋はラテン男の絶叫に包まれた。

ブリトニーは、まさにエンジン全開という態で、リズムにのって踊るように玉責めを続けた。

彼女は、身動きできない哀れな男たちに、みじんの情け容赦も見せなかった。

デビッドは、彼らの縛り方そのものが、睾丸への苦痛だけではなく、屈辱をも同時に与えていることに気づいた。

男たちの両足首は、重い鎖につながれているが、鉄棒などに固定されているわけではない。脚を閉じて脆い急所を防御しようと思えば、不可能ではないのだ。

だが、彼らは脚を広げたまま、恐ろしい攻撃をおとなしく待っている。すなわち彼らは、脚を閉じたりなどしたら、その後より恐ろしい事態に見舞われるであろうことを知っているのだ。すなわち、彼らはその睾丸を、サディスティックで小柄な歌姫の責め苛むに任せるしかないのである。

次の標的は、テキサス生まれのブラウンの髪の毛をした白人、テックスだった。

彼女は、まるで彼にフェラチオするかのように、真前でひざまずいた。

むろん、そんなことをしよはずがない。彼女は、拳を固め、睾丸めがけて突き上げたのだ。

そのパンチは、キックほどの威力はなかったが、この大柄なテキサス男は、そんな攻撃を予測していなかったらしい。

「うぐぐつ！！」

彼女の小さな拳が陰囊にのめりこみ、彼は苦悶の呻きをあげた。彼の上半身は前方に傾きかけたが、彼の両足の間から伸びて両手首を固定している鎖が、なんとか起立の姿勢を保たせた。

なるほど――。デビッドは舌を巻いた。

手首を固定する鎖は、彼らが簡単に倒れないため――なるだけゲームを長く続け、彼らをなる

だけ多く苦しめるための工夫なのだ。

つづいてブリトニーは彼の陰囊を握りしめ、引つ張るようにして睾丸をひねった。彼女の盛り上がった二頭筋は、どれだけ凄まじい力で睾丸を潰しているかを示していた。

テックスの顔は、苦悶の見本だった。彼の唇は、悲鳴をあげるように歪んでいたが、苦痛が激しすぎるためだろう、声を出す事はおろか、息も出来ないようだった。顔中、涙でぐしゃぐしゃだった。

10秒、20秒、30秒、40秒、50秒。

彼女は、ほぼ一分間、彼の柔らかい肉塊をいじめつづけた。叫ぶ事もできぬまま、テックスの口からきれぎれの嘔れ声が漏れた。「やめてください」「お願いです」

だが、彼の睾丸を握りしめつづける小柄な人気歌手は、耳を貸そうとしなかった。

「あなた、きらい」

ブリトニーは言った。

「ばつかみみたいな帽子かぶって、テキサスの自慢話ばかりしゃべくって。ほんっと、ばか。ほんとのこと言うと、あなたの金玉をまづ、ぶっ潰してやりたいの。そーいや、テキサスで飼ってる牛はみんな去勢されてるっていうじゃない。あなたも去勢してあげようか？」

彼女は返事を聞く気はなさそうだった。ひとりでしゃべりつづけた。

「でも、ルールはルール、尊重しなきゃ。第一、私が作ったルールだもんね。安心して、あなた

が倒れるまでは切っちゃったりしないから。それとも、もう諦めて倒れてくれる？ あんたの脚が、あんたの体重を支えきれなくなるまで、ひねってあげようか？ 私、やりたいことは全部やる主義なの。どう？ 我慢しないで、楽になったほうがいいんじゃない？」

彼女は本気で言っている。デビッドは確信した。

それから30秒後、彼女はテックスの睾丸を握りしめた手を緩め、山羊鬚の黒人、デレクに顔を向けた。

テックスの陰囊を握ったまま、彼女は左手を伸ばし、デレクの睾丸を同じように握ったのだ。両手で二つずつ、睾丸を握りしめながら、彼女はしかめっ面で二人の顔を交互に眺め回した。デレクに対しては唇だけで笑ってウインクし、テックスには、苦々しく唇を突き出しながら。

「あんたたちは、わたしの奴隷、だよね」

彼女は、目を細め、わざと内気そうな表情を作って言った。

デレクはすぐにうなずいた。

「そうです。おれは、あなたの奴隷です」

いちばん痛めつけられたテックスは、彼女の質問が聞こえなかったらしい。苦痛の表情で肩で息をするばかりだった。

ブリトニーは、デレクの睾丸から手を離し、テックスの睾丸にパンチを突き上げた。何度も何

度も突き上げた。

テックスは絶叫し、うめいた。

「すいません……俺……奴隷です……俺は、奴隷です……」

彼は完全にパニックに陥っていた。彼のうめき声にも、ブリトニーは玉パンチをやめなかった。彼女が拳を突き上げる度に、脚ががくがくと痙攣し、絶叫が迸った。

彼が、想像を絶する激痛に包まれているのは、その表情からも伺えた。彼はおそらく、自分の睾丸がバスケットボールほどに腫れ上がったように感じていることだろう。でなければ、苦痛に身をよじりながらも、睾丸に太股が触れないように、脚を少しずつ広げているはずがない。

デビッドの耳に、くすくす笑いが響いてきた。

三人の女性ダンサーたちだった。彼女らはみな、苦痛に悶える男たちを、実に楽しそうに眺めていた。

時には歓声をあげ、彼女らのポスを焚きつけるような言葉を投げかけていた。椅子に座った少女は、右手をスカートのなかに突っ込んでうごめかせていた。その指が、彼女のパンティの内側にあるのは間違いなかった。彼女の敏感な割れ目を、丁寧になぞっていることも。

こいつら、みんなビョーキだ……。



デビッドはばくばく高鳴る胸のうちで呟いた。きちがいだ。この女たちはみんなきちがいだ。いま、死にそうに悶えてる連中は、昨日まではともだちだったんだろう？ それがまるで、できることなら、自分の手で苛めてやりたそうな顔つきじゃないか……。

ブリトニーは立ち上がり、テックスの睾丸から手を離れた。彼の顔をのぞきこみ、何秒か、じつと見つめた。

テックスは嗚咽していた。ブリトニーは舌を突き出し、滝のように流れ落ちる彼の涙をなめた。「おいしい。もつとなめたい。後でもつと、涙を流させてあげる」

言い終わるなり、彼女はデレクの睾丸に膝蹴りを浴びせた。一度、二度、三度。デレクは絶叫した。悲痛な叫びが、ブリトニーの表情をさらにワイルドにした。

彼女はたてつづけに、鋭い膝蹴りを、デレクの股間に打ち込んだ。その都度、彼の上半身は少しずつ、前かがみになった。

「どうくく？ みんなくく、楽しんでるくく?!」

彼女は両手を交互にリックキーの睾丸にパンチを浴びせながら、女性ダンサーたちに向けて高い声で叫んだ。左右の拳が、サンドバッグ相手にボクシングの練習をするように、赤く腫れ上がった彼の陰囊を激しく揺らした。

突然思いついたようにブリトニーは、今度は二つの拳で同時に、挟み撃ちにした。右の睾丸がパンチから逃げようとしても、左の睾丸が邪魔に阻まれる。二つの肉塊が互いに押し潰しあい、苦痛を倍増させていた。

これよ、これ、これ！

リックキーの悲鳴は、これまでの誰よりも激しかった。ブリトニーは、自分の思いつきに満足し、興奮とアドレナリンで狂騒状態に突入していた。

もうそろそろくたびれてもいいころだが……。

デビッドは、目をそむけなくなるほど凄惨な光景の前に、そう思った。

だが、彼女は疲れるどころか、ますますハイになり、男の苦悶の表情に酔いしれているようだった。男たちが悶え苦しめば苦しむほど、彼女は自分のパワーを実感できるのかもしれない。

「これやりたかったのよお!!!」

彼女は、恍惚とした表情で男たちの睾丸を責め苛みながら叫んだ。

「これをやりたくて、がんばってきたんだからあ!!」

そう、屈強な若さあふれる大男たちも、彼女の前では無力な犠牲の小羊同然、おびえながらも無抵抗に屠殺されるしかないのだ。

爪先蹴り、膝蹴り、玉つかみ、握り潰し、悶絶、絶叫。

カルロスがついに弱音をあげる。「つ、潰れる……」

デレクが泣き叫ぶ。「か、勘弁してください……」

ブリトニーがテックスの股間を蹴り上げながら叫ぶ。「潰れる！潰れちまえ！」

テックスがうめく。「いやだ……お願いです……」

ダリウスがわめく。「た、助けてくれえ！」

リックキーが嗚咽する。「い……痛いよお……苦しいよお……」

男たちの苦悶と絶望に満ちた表情とは対照的に、ブリトニーは笑顔を決やさなかった。

彼女の行為は、悪魔のそれだったが、セクシーでキュートな笑顔は、まさに天使だった。

素手での攻撃に飽きた彼女は、重そうな革製の鞭を手にした。長さは80センチほどか、幅5センチ、厚さは3センチもありそうな、太い鞭だった。

彼女はその鞭を巧みに操った。最初のターゲットはリックキーだった。彼の太い陰茎に、重い鞭がびしりと打ち込まれ、たちまち真っ赤な蚯蚓腫れが走った。

驚いたことに、彼女はリックキーのペニスに鞭を浴びせながら、隣の男の睾丸を脚で蹴り上げ、同時にもう一人の男の睾丸を握り潰していた。その正確さはまるで精密機械だった。

彼女の攻撃は、ワイルドかつ残忍だった。もう順番に一人ひとりやるというのではなく、あちらと思えばこちら、自由気ままにターゲットを変えていった。五人をほぼ同時に痛めつけたかと思うと、一人だけを執拗に一分以上も時間をかけることもあった。

そのやり方も、相手を変える度に、デビッドの想像した以上の残忍さを見せた。実際、これだけの罰を受けるに相応しい罪とはどんなものか、彼らがそうされても仕方のない何をやったのか、見当もつかなかった。

さらに彼女は、標的となったダンサーが失神しそうになる寸前に攻撃をやめ、次の標的に移った。ランダムに相手を選んでいて、実は誰かが失神してゲームが終わることのないよう、細心の注意を払っているようだった。睾丸がほんとうに潰れてしまわないよう、それでいて十分な苦痛を味わうよう、工夫していた。口では潰すぞ、とか言いながら、同時に睾丸がダメージから回復するだけの「休憩時間」も与えていた。

残忍なショーは30分ほど続いた。

疲れたのか飽きたのかは分からないが、彼女がソファに倒れ込むように座ったとき、もはやダンサーたちは悲鳴やうめき声をあげることすらできないくらいのダメージを受けていた。

ただ、去勢されたくないという思いだけが、むろん座することも許されていない彼らを支えているようだった。

4 休み時間

デビッドの傍らに座ったブリトニーは、汗でびっしょりだった。その汗が、彼女のボディにさらなる輝きを与えていた。

ソファのひじ掛けにもたれながら、彼女はストレッチをしていたが、ふとデビッドの表情を見て、弾けるように笑った。

デビッドは恐怖のあまり表情が凍りつき、じっと足元を見つめ、両手で膝をつかんでいた。とても彼女を見ることなどできなかった。

「どうしたの？ 気分でも悪いの？」

彼女は、首をコケティッシュに左右に振りながら言った。

「楽しかったでしょ？」

「楽しかった?!」

「まあ、しばらく見てて。このゲームが終わったら、あんたとも遊んであげるから」

ブリトニーの乾いた口調に、デビッドはびくりとし、ゆっくりと彼女に視線を向けた。目が合ったとき、彼女はウインクしてみせた。

そして、ゆっくりと右脚をあげ、ブーツの踵を彼の股間に載せた。重い踵が彼のペニスに触れた。息が詰まった。

「まだ、立ってる?」



彼女はそう言いながら、彼のズボンの股間の膨らみを見つめ、踵でそれを撫でた。

「うん、まだ固い」

脚を引つ込めると、彼女は姿勢をただし、デビッドにくっついて座った。

そしていきなり、胸の部分のジッパーをおろした。

二つの大きな乳房が、デビッドの鼻先数センチの位置に飛び出した。ブリトニーはそのみごとな乳房を誇示するように、大きく背筋をのばし、胸をそらせた。

デビッドは思わず、その豊かな膨らみに入った。

大きいだけではない。美しい形を描いていた。

彼のペニスは、爆発しそうなくらい、膨張した。

ブリトニーは悪戯っぽい目つきでデビッドを見つめ、

嘲笑するように囁いた。

「……すけべ！」

それから哄笑し、デビッドの肩を叩いて立ち上がった。

彼女はトッププレスのまま、五人のダンサーたちを品定めするように見た。
五人とも、汗みずくで、荒い息をしていた。苦痛のあまりうなだれたまま、顔をあげることもできないようだった。

十個の睾丸はすべて、通常の倍近く腫れ上がっている。

五本のペニスは、亀頭も陰茎も、蚯蚓腫れの跡が生々しかった。

全員、涙を流してむせび泣いていた。

5 ワン・オン・ワン

「じゃ、第二ラウンドよ！」

ブリトニーは大声で叫び、半死半生のダンサーたちは、びくりと顔をあげた。

「これからは、ちよつとやり方が変わりますけど、ポイントはおなじですからね」

彼女は、ゲームショーの司会者のような口調で言った。

これ以上、どんなやり方があるというんだ？

デビッドはいぶかった。ブリトニーはさらにオクターブをあげた。

「男性諸君はどうか知らないけど、私はとくしくつても、ノリノリだよーん！」

彼女はゆっくりと、テクサス出身のテックスに歩み寄った。お尻を振り、踵からおろして爪先を踏みしめる彼女の歩き方は、ゴージャスでセクシーだった。両手でむき出しの乳房をつかみ、指で乳首を弄んでいる。

テックスはぎゅっと目をつぶり、泣き出した。

「あれえ、なんで泣いてるの？」

彼女は子どもをあやすように訊ねた。彼は返事せず、ひたすらしゃくりあげた。

ブリトニーは彼の耳元で囁いた。

「私言ったよね、あんたがだああくいつきらいだつて。だからあんたを最初に潰すつて」

彼はすすり泣いた。

「そこに膝まずいて……。何してるの？ さつさとやんなさいよ。お願いだからあ。大丈夫、すぐすむわよ。さ、さ。痛くないようにしてあげるからさ。ほんと、約束よ」

彼女は、テックスをいたぶるように、柔らかな、間延びした口調で言った。

彼は目をぎゅっとつぶったまま、逡巡しているようだった。痛い思いをせずに速くすませてくれるなんて、とうてい信じられない。テックスも同じ結論に達したのだろう。首を横に振った。

「いやです」

テックスの口許に耳を寄せていたブリトニーは、何を言っているのか分からないという怪訝な表情を浮かべた。

「好きにしまよ」

彼女はくるりと踵を返しながら言った。

「せっかくチャンスあげたというのに……」

彼女は肩ごしにテックスをにらみつけながら毒づいた。

「チャンスは一度きり、それをあんたは拒否した。そんなに痛い目に合いたいってわけね」

テックスの表情に、ありありと「しまった」という感情が浮かんだ。

ブリトニーは、彼から数十センチの位置で立ち止まり、彼に向き直った。

ドカッ！！



彼女の重いブーツの爪先が、彼の睾丸を直撃した。

睾丸は一瞬、爪先と腰骨との間でひしやげた。

通常ならば、睾丸は彼の下腹部にのめりこみ、さらなるダメージから逃げるはずだった。だが、不運なことに、彼のブリーフは、彼女自身がデザインしたのだろう、睾丸があがらないよう工夫がされ

ていた。あわれな鞆丸はぶらさがったまま、さらなる攻撃を待つしかなかった。

ブリトニーはさらに蹴り上げた。どこからそんな声が出るのかと思えるほど、想像を絶する凄まじい悲鳴がほとばしった。それは、彼女が第一ラウンドよりもさらに強く蹴り上げていることや、テックスが味わっている苦痛の大きさを示していた。

さらに二発、鋭いキックが彼の鞆丸に襲いかかった。彼女は全身の力をこめ、テキサス男の急所を蹴りつづけていた、他の男にはなんに關心も持っていないかのように、テックスだけを攻め続けた。

彼女は、あきらかにテックスを膝まずかせようとしていた。

ルール違反だ……。デビッドは思った。ルールは公平であるべきなのに。

「膝をつけ！」

ブリトニーは怒鳴り、嵐のようなキックをたてつづけに浴びせた。

「膝をつけ！」「膝をつけ！」

ベッドの上に寝そべる二人の女性ダンサーが合唱した。椅子に座ったもう一人の少女は、自慰に夢中で声を出さなかったが。

十回以上、立てつづけに蹴り上げられ、テックスの脚はもう制御不能に陥っていた。

全身が激しく痙攣していた。

さらに三度の蹴りを受け、彼の膝が曲がりはじめた。彼は全身全霊でくずおれまいと踏ん張っ

ていたが、もはや限界に達していた。

彼に残されたかすかな望みは、ブリトニーが疲れて蹴るのをやめるまで、なんとか立っていようとする事だったろう。あるいは、彼女は他の誰かを蹴り始めるかもしれない。あるいは、万が一、誰かが助けに来て暮れるかもしれない。

だが、無駄な努力だった。

ドガッ！！

ドガッ！！

さらに加えられた二度の蹴りで、彼の脚は完全にコントロールを失った。

ついにテックスは膝をついた。テックスは顔をあげ、恐怖に凍りついた顔でブリトニーを見上げた。

ブリトニーは勝ち誇ったように微笑んでいた。

「だから、さっさと膝まずけって言ったのよ」

6 最初の敗者

彼女は、さきほどデレクを脅したのと同じナイフをテーブルから取り上げた。

そしてゆっくりと、呆然とうなだれるテックスに近寄り、膝をついた。

二人の目と目があった。

「い、いやだ〜〜!!」

テックスは悲鳴をあげた。

「お願いです！ やめてください！ 心を入れ換えます！ 真面目にやります！ だから、どうか……」

彼は、何度も頭を下げ、小柄な少女に向かって懇願した。

だが、彼女は聞く耳もたず、刃渡り20センチのナイフを彼の顎の下に差し込んだ。

「お・だ・ま・り！」

ブリトニーは、一語一語、刷り込むように、ゆっくりと言った。テックスは瞬時に口を閉じた。

「あんたは一度しかないチャンスを、自分から拒否したの」

それから数分、目の前で起こった出来事を、デビッドは夢でも見ているような思いで目撃していたのだ。

目の前の光景が、とても現実だと信じる事ができなかった。

今まで繰り返された凄惨な「お仕置き」も、現実だとは思えなかったが、それ以上のことを、彼女はやってのけたのだ。

彼女は、右手でナイフを弄ぶように振り回しながら、左手でテックスの巨大な男根をつかみ、ぎゅっと強く握りしめた。

その姿は、ホラー映画に出てくるシリアル・キラーのようだった。

ナイフの尖端が、ペニスの付け根に押し当てられた。

それから一瞬の間を置いて、彼女は部屋じゅうを見回した。

あらゆる視線が彼女に注がれていた。

女性たちはみな、期待にわくわくしながら、膝立ちになっていた。

男たちはみな、恐怖の面持ちでいた。

デスクに向かっていたマネージャーのキャシーも、ペーパーワークを中断し、こちらを見つめている。

ドアに立っているボディガードは、かすかに犠牲者への同情心を表情ににじませている。

デビッドを除くみんなは、これから起こる事態を、すでに知っているようだった。デビッド一人だけがまだ、すべてが、実はジョークだったということが終わらないかという望みを抱いていたのだ。

だが、その望みも次の瞬間に打ち砕かれた。

鋭い刃が、テックスのペニスに食い込んだ。

その瞬間、テックスは大きくのけぞり、金属を切断するような、苦痛と絶望に満ちた悲鳴が部屋中を満たした。

テックスの全身が前後左右に激しく揺れた。

ブリトニーは、彼が逃げぬよう、さらに強くペニスを握りしめた。

そして、ゆっくりとペニスに深々と食い込んだナイフの刃を、亀頭の真下を握っている彼女の左手に向けて引き始めた。

デビッドは彼女が何をしようとしているか理解した。

彼女は、テックスのペニスを唐竹割に、真つ二つにしようとしているのだ！

彼女はわざと時間をかけていた。2センチ進むのに1分近くかけて、ナイフを動かしている。

テックスはもはや悲鳴をあげる余裕もなく、彼の男性の象徴がゆっくりと破壊されていくのを、眼球が飛び出さんばかりに見開いて、凝視していた。

数分後、ナイフはついに、彼の亀頭まで進んだ。

ブリトニーは、左手を離し、さっとナイフを引いた。

テックスのペニスはみごとに縦一文字に切り裂かれ、左右に分かれた。

血が海綿体とともに勢いよく迸り出た。

三人の女性ダンサーと、キャシーは、歓声をあげ、ブリトニーを褒めたたえた。

ブリトニーは立ち上がり、叫んだ。

「みごと、まっぶたつよ！」

彼女は、ナイフを持つ右手を高く突き上げた。血が、刃から滴り落ち、彼女の腕を濡らした。

彼女はテックスに視線を移した。彼はもはや恐怖と激痛で失神寸前だった。

彼女は、シャンパンを冷やしていたバケツを持ち上げ、なかの水をテックスの顔にぶちまけた。

冷たい水と氷を顔にぶつけられたテックスは意識を取り戻し、同時に股間を苛む凄まじい激痛に身をよじって痙攣した。

「まだ終わってはいないわよ」

彼女は、彼の耳元で、ねじこむように怒鳴った。

彼女は再び膝まずくと、左手で彼の陰囊をつかみ、ぎゅつとねじりながら引張った。

そして、ナイフの先端を陰囊に当て、さっと切り開いた。



裂け目から、血とともに睾丸が二つ、こぼれ落ちた。

彼女はナイフを投げ捨てた。尖端がトンと床に刺さって立った。

右手で、睾丸につながっている管を握りしめ、ぎゅっと引っ張った。

二つの睾丸は、床にすれすれの位置、彼の股から20センチばかり下にぶらさがった。

むき出しとなった睾丸は、クルミくらいの大きさで、赤黒く腫れ上がっていた。

彼女は、右手で右側の睾丸をつかみ、乱暴に掌で転がした。それから、睾丸とテックスの胴体を結ぶ2本の管を指に絡め、ぐいっと全身の力を籠めて引っ張った。

「ぐわあああ!!!!!!」

テックスは絶叫した。

管がちぎれ、睾丸は完全に本来の持ち主から引き離され、ブリトニーの掌中にあった。

彼女は、確かめるようにしげしげと、掌にある肉塊を眺め、それからテックスの顔を見ながら、血まみれの指で唇を撫でた。官能的な唇が、真っ赤な血に染まった。

「もう一個、いくわよ」

彼女は手を伸ばして、残る一個の睾丸を固く握った。

「それとも」

彼女が女性たちの顔を見た。

「かわいそうだから、一個だけでも残しておいてあげる？」

「だ〜〜め〜〜!!!」

女性四人は声を揃えて叫んだ。

ブリトニーは彼女たちに笑顔で応え、ぐいと引っ張った。

その瞬間、テックスの去勢は執行された。

テックスの口から血反吐が迸り出て、ゆっくりと後ろに昏倒した。

股間から、泉が湧くように血が吹き出し、血溜まりをつくった。(つづく)